



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	神話と物語
Author(s)	石川, 智子
Citation	基督教学, 37, 23-25
Issue Date	2002-07-04
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46655
Type	journal article
File Information	37_23-25.pdf



いること、そしてその中心に位置し、学田農場や北光社を生み出したものこそ武市安哉の理念と実践であったことを意味している。

研究発表要旨

神話と物語——ハンス・W・フライのシュトラウス批判

石 川 智 子

シュトラウスの『イエス伝』（一八三五年初版）は、近代以降の学問的な聖書研究の端緒に位置づけられる重要な著作であり、この著作で展開された福音書の「神話的解釈」は、その後の研究によって精緻化されていく方法論を予感させるものである。シュトラウスは『イエス伝』で福音書批判をするに先立って、ホメロスの作品に対するギリシア人の解釈から同時代までの聖書解釈の歴史を

たどった上で、自らが依拠している神話的解釈の立場を明らかにし、この立場から福音書全体を検証すると宣言している。しかしながら、シュトラウスの「神話」概念はそもそもカテゴリー・エラーである、と批判するのがハンス・フライ（一九四二―一九八七年）である。

フライは主にアメリカにおける「物語神学」の旗手として活躍した神学者であるが、『聖書物語の蝕』（一九七四年）のなかで聖書の歴史的批判的研究に対する批判をおこなっている。フライは18世紀から19世紀の初期にかけて聖書解釈に根本的な変化が生じたと見ており、そのような変化が生じる前の聖書の読み方は「リアリズムの」、すなわち「字義的かつ歴史的」なものだったという。しかし、理神論から出発した聖書批判と歴史的批判が、それまでは分かち難く結びついていた二つの要素、すなわち聖書の物語の字義的な意味と実際の出来事への指示を引き離し始めた。実際に起こった出来事と物語の意味が物語形態と分離できるものと見なされ、また出来事が実際に起こったかどうかに関わらず、聖書の物語の意味を取り出すことができると考えられるようになったのである

る。以前のリアリズム的な読みに含まれていた字義的な読みとその延長としての比喩的な読みは、それぞれ歴史的批判と聖書神学へと展開し、両者の連続が失われることになった、とフライは指摘する。

シュトラウスの時代はまさに聖書解釈の転換期であった。当時、信仰と学問の關係が活発に論じられたが、シュトラウスはその両者を完全に区別できるものと考えていたからこそ、福音書の歴史的批判を徹底的に貫くことができたとフライは見ている。神話という概念を用いて福音書の説明を試みた学者たちには、神話の意味ないし内容と描写の形式が明確に分離できるものであるという共通の前提があり、シュトラウスも例外ではない。しかしながらフライによると、神話の分類の中での福音書の位置付けをめぐる彼らの間でなされた議論は、福音書の持つ独特な、フライの言葉で言えばリアリズム的な性格を、実のところ彼ら自身が認めていたことを明らかにするものにはかならない。シュトラウスは、福音書のリアリズム的形式についての認識と物語の意味は形式から分離できるという前提との間にある矛盾の極みを示してい

るとというのがフライの結論である。シュトラウスが用いた「神話」というカテゴリーの中では、物語で描かれた出来事が実際にあったかどうか、つまり史実かフィクションかという問題を検討する歴史学的手法と、物語の意味とその形式との間の緊密な關係、言うなればリアリズム的な關係を記述する解釈学的な試みが、相容れないままに存在しているとフライは主張するのである。

シュトラウスの神話的解釈から非神話化論を経て、現代の聖書研究においてはもはや「神話」について言及されることはなくなり、代わって「物語」という概念が用いられるようになっていく。特に、アメリカを中心とした一部の神学者たちの間に見られるような物語をキーワードにした聖書研究には、「物語神学」等の名称が与えられている。しかし神話にせよ物語にせよ、どちらの概念も定義や用法は各論者によって異なるが、どちらの場合も概念の理解にある程度の振幅を許容することでの妥当性を得ているという性格には共通するものがある。フライは信仰と学問の分離をシュトラウスに見たが、シュトラウス自身は、少なくとも『イエス伝』を執筆した当

研究発表要旨

イエズス会東インド管区 コレジヨの財源形態について

高橋 裕史

はじめに

初は、その両方を何とかなして共存させ両立させることを目論んでいた。神話という概念によって、本来統一的なものであるべき聖書が神学者と歴史学者との間で引き裂かれることになったというフライの認識は、おそらく誤ってはいないだろう。しかし聖書を再び物語として読むべきだというフライの主張においては、信仰と学問と対置された場合の学問をどう扱うかという問題がないがしろにされているという印象がある。私たちは、シュトラウスが直面した葛藤と神話という概念のもとで企てた試みを再度顧みる必要があるのではないだろうか。

イエズス会は海外布教を推進し、教勢の拡大を図ったが、エチオピアから日本に至る東インド管区は、同会「最大の管区」であった。イエズス会は各種の布教機関を有しているが、コレジヨ Collegio は「神への奉仕に身を捧げる者を排出する場」として規定された、最重要布教機関であった。そのためコレジヨは、その重要性から、例外として私有財産の所有が公認されていた。ここでは、イエズス会東インド管区に置かれたゴア、サルセッテ、バサイン、コチン、マラッカの各コレジヨの財源形態を分析し、イエズス会の経済構造の一端を紹介したく思う。